
6つ子のパドリック

天海慎也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6つ子のパドリック

【Nコード】

N5732F

【作者名】

天海慎也

【あらすじ】

この国には6つの種類の人種が存在する。マンカイド、フロラ、ロギア、リード、クリチャーそして、キープビリティ。身分制度の強いユースタリア国に生まれた6つ子の兄弟。不運なことに彼ら6人は生まれつき種族が違っていたため、国の方針で引き裂かれた。10年の月日がたち15歳になった彼らは自由を求めて、6人全員で暮らせる国、パドリックへの逃亡を決意する。

『第1話』

この国には6つの種類の人種が存在する。

この国の約30%を占め、知能IQが高い、マンカイド。

この国の約20%を占め、自然を愛し植物の力を巧みにあやつる、フロラ

この国の約20%を占め、自然を愛し自然の力を巧みにあやつる、ロギア

この国の約14%を占め、生きていないものに命を与え、その物を操る、リード

この国の約13%を占め、生きているものと契約を交わし、その動物を操る、クリチャー

この国の約3%を占め、知能IQの低い代わりにマインドコントロールやテレパシーを得意とする、キープビリティ

.....

霧橋 きりはし 霧風 ふんぷはそう書かれた本を嫌な顔をしながら閉じた。

そして、本を机に置くと机の隣のベットの腰掛けた。

「なあ？ 浩介。俺らってそんなに知能低いのかな？」と霧風はルームメイトの浩介に聞く。

「なんだよ…突然！」と浩介は読んでいたマンガを閉じて霧風の顔を見た。

「いや…。だつてよ…。」と霧風は言葉を詰まらす。

「さあ？ 俺マンカイドに会ったことないし…分かんないよ」と浩介「だよな…」

「でも一つだけ言えるのは授業で習った通り、俺らは知力に行くための力を透視やテレパシーに使っているということだろうな」と浩介。

「そっか…」と霧風は呟くとベットに横になり天井を見つめた。

霧風はキーブビリティである。もちろん浩介も……。

ここは、国政強制少年超能力者更生教育施設である。

キーブビリティとして生まれた者は皆、ここで教育を受けるのだ。

キーブビリティの大半は金髪をしているが、霧風だけは黒髪に黒い瞳を持っていた。

黒髪に黒い瞳はマンカイドに多く、霧風は友達に羨ましがられていた。

霧風は目を閉じた。

すると、意識がどこかに吸い込まれていく気がした……。

あつ……予知夢……。

そう思った瞬間もう意識はそこに吸い込まれていった。

頭が揺さぶられる感覚、激しい頭痛、もうなにがなんだかわからない……。

頭が真っ白になった……そして、次の瞬間。

霧風の目の前にこの施設の談話室が見えた。

時刻は12時半ごろ、暗い談話室のイスに一人の男が見える。

その男は自分と同じ顔、そして緑色の髪……。

そして、男は、「待っていた」と霧風に向かって言う。

「兄さん!!」という自分の声が聞こえた。

その声と共に目の前が真っ白になり、また頭が揺さぶられ気がつく
と、ベットの上がった。

目覚めると同時にひどい吐き気がし、霧風はトイレに駆け込み全て
を吐いた。

トイレから出てくると浩介が言った。

「予知夢か？」

「ああ……。」

「大丈夫か？」

「いつものことだ」と霧風。

「そうだが……つらいよな？」と浩介。

「キーブビリティに生まれた以上避けられねえよ」と霧風は苦笑い

を返す。

「まあな」と浩介。

キープビリティは予知夢を見るとひどい頭痛や吐き気に襲われるのだ。

「予知夢を見るとキープビリティに生まれたことを後悔するよな」と霧風

「俺は、予知夢見なくても後悔してるぜ」と浩介。

「そりゃそうか」霧風は苦笑いをした。

キープビリティとして生まれた子はその強い能力のためコントロールがうまくいかず自傷行動を起こす子や精神崩壊、強すぎるテレパシーのためにしゃべることが困難な子、予知能力や人の心を読む能力のために現実が分らない子、また現実に意識を戻すことのできない子も存在するのだ。

浩介はその中の一人だったらしく人の心を読む強い能力のために話すのが困難であり、親からひどい虐待を受けたひとりであった。

「この前、佳織が深い予知夢で痙攣を起こして病院送りになったからおまえも気をつけろよ」と浩介は言ってマンガを読みだす。

「ああ。気をつけるよ」と霧風は言って、またベットに横になり、今の予知夢を思い出す。

俺と同じ顔…。

緑の髪…。

兄さん…。

まさか…まさか…いや、そんなはずはない…。

そんなことを思いながら霧風の頭のなかには懐かしい兄の顔が映っていた。

元々、霧風は6つ子の末っ子として生まれた。

しかし、6人全員ちがう人種として生まれてきてしまったのである。その6人の中で一人だけ緑の髪を持つ兄がいた。

さつき出てきた男はその兄にそっくりだったのだ。

その兄の名は壱^{いち}。

六人兄弟の長男として生まれ、兄弟唯一のマンカイドである。彼とは5歳の時以来会ってはいない。

「霧風!!」と突然、浩介に大声で呼ばれ霧風は飛び上った。

「な、なんだよ・・・」

「さっきから呼んでいるだろう?」

「えっ?なに?」

「何?じゃなくって...僕の話聞いてた?」

「あっ...ごめん...全然」と霧風。

浩介は溜息を一つ吐くと、だから...と話を始めた。

「今日の討伐で何人殺した?」

「うん?12人かな?...なんで?」

討伐とは、犯罪や凶悪な犯罪組織やそれに関わっている人を政府の勅令の下で殺すことである。

この国では、キープビリティ（超能力者）はその時だけ能力を使うことができるのである。その理由は、犯罪者が能力者であつたりするからである。

「今、治とテレパシーで話しててさ」と浩介

治とは、この施設で一番、テレパシーの力が強い子である。

治の部屋はこの部屋から3つほど隣にあるが、浩介はその部屋からテレパシーで治と繋がっているみたいだ。

「ランキングによるとおまえ1位らしいよ?」と浩介。

「なにが?」と霧風。

「だから...討伐の成績!!」

「あ...そう...」と霧風。

「やっぱり3Sクラスは一味、俺らと違うよな?だって治が...」と浩介。

「そんなことない...」と霧風は言い放つと目を瞑った。

暗闇に意識が吸い込まれていった。

それから、何時間たったのだろう...。突然夜中に目を覚ました。浩介が向い側のベットで寝ている。

霧風はそつと枕の下に隠しといた袋を掴み、ベットから抜け出した。部屋の唯一のドアのカギをサイコネシスで音をたてないようにして軽く鍵穴を回すと、ドアのカギが“カチッ”と音をたてて開いた。ドアノブをひねりながら、ドアの外についているドアノブの警報線を弱いサイコネシスで切り落とす。

そして、部屋のドアを引いて廊下に出た。

脱出成功である。

初めて夜、部屋から抜け出したのは、6歳のころだったかなあ？と思いつながら霧風は暗い廊下に足を出す。

たしか警備員は二人だったよな？と思いつながら、霧風は透視を使つて警備員を探す。

おっ！ゲット！！二階の階段と三階の廊下か！

霧風は二人の警備員と意識をつなぎ、歩き始めた。

どうしても生き別れになつた兄さんに会いたかつたのだ。

確か…兄さんがいるのは談話室…談話室は二階だったなあ…と霧風は思いつながら、階段を上り談話室へとやって来た。

真つ暗な談話室に黒い人影があつた。

その人影がこちらを向く…

「に…い…」そこまで言つて霧風は言葉を詰まらす。

その人影は兄さんではなく、クラスメイトの準であつた。

彼は強いサイコネシスの力を持っており、この前友達とケンカをした時にその力で友を殺し、独罰房に放りこまれた男である。

「よう！霧風。」

「準…解放されたのか？」

「そんなことあるはずねえだろう！！」と準は髪を逆立て霧風に怒鳴り、サイコネシスを霧風に飛ばす。

霧風の体は宙を舞い壁にすごい音でぶつかる。

「逃げてきたんだよ」と準は笑いつながら霧風を見つめる。

「あんなひでえ場所に何日もいれるか？」と言いつながら、準は霧風の頭をまるでボールのように蹴り上げた。

霧風は後ろの壁に強く頭を打って気を失った…。

フン…フ…！

おい！霧風！！

と体を揺すぶられ、霧風は目を開けた。

目の前は頭を打った影響なのか白く霞んでいる…。

ふわふわしたものが頭にくっついていて感じる。

視界は定まらなかったが、誰かが霧風の顔をのぞきこんでいる。

「おい！霧風、大丈夫か？」

自分によく似た懐かしい声が耳に響き、定まらない視界のなかに風に吹かれる緑色の髪が見えた。

「い…ち…兄さん？」

「そつだよ。霧風」と懐かしい声がした。

「そつか…よかった…」と霧風はつぶやきまた意識を失った。

「霧風！」と舌は霧風に向かって叫んでいた。

(2)

それから、12時間後霧風は日の光で目を覚ました。

目を覚ますと目の前には見たことのない天井が広がっていた。

「ここどこ？」とつぶやいて霧風は起き上った。

「いてっ！」頭をあげると頭のとっぺんにひどい激痛が走る。

「まだ寝てなきゃだめだよ？頭さつき縫ったばかりなんだから」と声が聞こえた。

確かに、頭のとっぺんには大きなガーゼが貼つてある。

「霧風！ひさしぶりじゃん」と突然男が霧風の前に顔を出す。

「うわぁ！」と霧風は大きな声をあげた。

「記念すべき第一声が“うわぁ！”かよ…兄ちゃん泣いちゃう」と男は赤い髪を振り回して泣くしぐさをする。

「も…もしかして…陸兄さん？」と霧風は呟いた。

「そうそう！陸、陸！」と陸は嬉しそうに霧風に笑いかける。

陸は6つ子の二男で、植物を操るフロラの力を持っている。

「ねえ？陸兄さんここどこ？」

「兄さんなんて言うなよ…なんか照れるじゃん」と陸は言って苦笑いをして「ここは車の中で今、STGから逃げているところ」といった。

「STGだつて…！」霧風は声をあげた。

STGとは青少年超能力者改革実行委員会のことであり、この国の超能力者の全ての管理を政府から任されている機関のことである。

STGに追いかけているということは犯罪者と同じく命の保証はなくなる。それに、いままでSTGから逃げられた者はいない…なぜなら、彼らは超能力者の中でもずば抜けて能力の高い者たちを集めた特殊集団SSCを使って犯罪者を捕まえるのである、SSCは超能力で人を殺すことを唯一許されている集団であり、霧風もこの集団に所属していた。

「なんで？STGに追いかけているの？」

「霧風を国政強制少年超能力者更生教育収容所から連れ出したからかな？」と陸。

「収容所？違うあそこは学校だ！」と霧風。

「そうか…」と陸。

「僕を学校に返して！」と霧風。

「それは出来ない」と助手席の金髪の男が霧風を見て言う。

「あ…あ…アラシ兄さん？」と霧風は驚いてつぶやく。

そう霧風のほうを向いたのは6つ子の三番目、ロギアとして生まれた嵐士^{あらし}だった。

「ああ、久し振りだなあ？」と嵐士はニヤリと笑って話を続けた。

「STGはもうお前を犯罪者とする表明をだしたぜ？今頃、収容所に戻っても殺されるだけだ。」

「そんな…で…でも、ちゃんとした理由を話せば…」と霧風が苦し紛れにそう言うのと運転席から声がした。

「残念だけど、過去一回もキープリテイの話が通った裁判は存在しないんだ。全て、一方的な裁判だからこの国が始まってから一度も無罪判決は出されたことないし、死刑以外の刑が下されたこともないんだ」

「そんなの…嘘だ…！」と霧風は叫んだ。

「いや、本当だ。マンカイドが言うんだから間違えないよ」と陸。

「マンカイド？」と霧風。

「そうだ」と陸は言って運転席を見た。

「もしかして…壺にい…？」と霧風。

「そうだ」と壺。

運転席のバックミラーに壺の顔が映っていた…。

「なんで？」と霧風はつぶやいた。

もう、わけが分らなかった。なんで？10年前に離れ離れになった壺にい、陸、嵐士兄さんがここにいて、なぜ自分は学校ではなくここでSTGに追いかけられているのか？さっぱり分らず、霧風はこ

れが夢であつて欲しいと思つた。

しかし、霧風にはこれが夢ではないことが分かつていた。なぜなら、キープリティの見る夢は全て予知夢か過去夢であり、その夢はどちらも見ている時はまるで写真をめくっているかのように一つ一つの場面がアバウトに照らし出され、映像が長い間映し出されることはまず予知夢は少ない。過去夢は映像の場合が多いが、その映像は過去にあつた出来事のためにその画面全体がぼやけておりその画像に色鉛筆で色を塗つたというぬりえのようなアバウトな画像として映し出されるのだ。しかし、今、目の前にある画像は実にリアルに映し出されており、夢でないことが一目瞭然だつた。

「6人合せて60万バーギド…また、懸賞金が上がりましたね」と車の後部座席から声がする。

霧風はまさか！！と思つて後ろを見た。

そこには銀髪の青年がノート型パソコンをいじつていた。その隣には体格の良い青い髪の青年が静かに座つていた。

「えっ？…鏡平？と燦ちゃん？」

「そのクエスチョンはなんですか？まさか自分の兄の顔を忘れたわけじゃないですよね？」と銀髪の青年、鏡平は霧風の顔を見て魔王のように笑つた。

「そうじゃなくて…」と霧風は10年ぶりに変わらない鏡平の皮肉な言葉に怯えながらそう言つて、隣にいる燦を見た。燦は無表情のまま霧風の頭を撫でると10年前より低くなつた声で「おかえり」とただそれだけを呟いた。

「た…ただいま」と霧風は燦にそう返す。

「霧風…？」と燦が優しく声をかける。

「えっ？」

「涙…」

「へっ？」と霧風は燦にそう言われて初めて自分が泣いていることに気づく。

「どうした？霧風！！」と陸が慌てた声を出す。

「やっぱ頭痛いのか？」と嵐士。

「言い過ぎましたか？」と鏡平も少し慌てている。

霧風は首を振る。

燦の「おかえり」という言葉で全ての感情が溢れ出てきた。

「もう…会えないと思っていた…」と霧風はポツリと言った。

10年前のあの雨の日、幼い壱兄が血だらけで弟達の名前を呼んでいた。

強制的に施設へと連れて行かれようとする弟達に手を伸ばし、必死に…

弟達を乗せた車をもつ走ることも辛いであろう血の滲みでた足で追いかけてくる兄の顔を霧風はこの10年忘れたことがなかった。

「そうか…」と陸は霧風の背中を撫でる。

「俺だって壱が国義務第一特別口ギア教育西中学校の寮に忍び込んで来なければ、身分の違う俺らがまた会うことができるなんて思っ
てなかったぜ？ましてや霧風に生きている内に再会できるとは…」
と嵐士。

燦が霧風の頭をポンポンと三回近く優しく叩いて「泣くな…」と言った。

「うん…」と霧風は涙を拭う。

「ところで壱兄貴。逃げ切れるのか？」と嵐士。

「うーん…どうだろ？」と壱。

「どうだろじゃねえだろ！！」と嵐士。

「だって…」と言う壱に嵐士は溜息を洩らす。

「あれ？ここって高速道路だよね？」と突然壱は今気づいた！とでもいうように言った。

「えっ？そうだと思うけど…」と嵐士は窓の外を見る。

「じゃあ、鏡平の出番だねえ？」と壱は車を運転しながら笑う。

「…必要最低限で良いですか？」と鏡平はパソコンをしまいながら言う。

「いいんじゃない？たぶん十分だよ」と壱。

「STGに超能力者がいたら一瞬で壊されますよ?」

「うん…たぶんいないよ、まだ朝の六時だし…」と壱。

「でも、透視とか…」

「それはないと思うよ?」と霧風が鏡平の話を裂く。

「透視してれば、僕わかるし…それに」と霧風は嵐土を見る。

「嵐土が後ろに台風を置いてきたから透視の妨害にもなっている」と壱が笑って言う。

「うん…」と霧風。

「あら? 壱兄貴も霧風もなんで台風置いてきたって分かるの?」と嵐土。

「透視しようとしたら嵐土にいの台風で方向分らなくなった」と霧風。

「ラジオで台風情報やっているんだ」と壱。

「あらあら? 俺迷惑かけている?」と嵐土はいたずらをしたように笑った。

「ですね?」と鏡平は皮肉のように言い、

「でも、なんとか逃げられそうですね?」と壱に言った。

その瞬間、六人を乗せた車の後ろの道路が盛り上がった。

そして、その道路はどんどん成長しやがて空に届きそうな大きな壁が道路を塞いだ。

後ろから追いかけていたSTGの車は急ブレーキをかけて止まりその後ろから来た一般車も立ち往生した。

STGの車から出てきた男がそれを見上げて呟いた。

「…これは…リードの力…しかし、こんな短時間で壁が作れる奴がいたとは…」彼は背筋が凍った感覚を覚えながら、STGの本部に連絡した。

「脱獄者。捕獲失敗。突然道路に立ちふさがる壁出現、すぐ写真送る」

STGの本部に道路を立ちふさぐ壁の写真が送られると委員達は騒ぎ始めた。

「こんな壁を作れるのはリードしかない…」

「短時間でこんな大きな壁を作れる能力者はそう多くはないだろう？ RUGに連絡しろ！！」

「超能力者達はどうした？ 何！！ 台風で力がつかえない？ 誰だ！ 台風をつくったのは！！！」

STGは脱獄者が逃げられるという異常な事態に混乱していた。

その頃、壁を作った張本人は何もなかったようにパソコンをいじり、台風を作った嵐士は「腹減った」と叫んでいた。

高速を降りながら壱が言う。

「そつえばさあ？鏡平。壁作るのがってリードにとって基本中の基本だけど…タイミングずれたら足止めにならなかったんじゃない？落とし穴の方が有効的だったんじゃないかな？」と壱。

「…この俺がタイミングを間違えることはない。」と鏡平。

「そうだね」と壱は鏡平のあまりの自信のありように嬉しさのあまり苦笑いをした。

「あゝあゝ。なんか嵐士と鏡平だけ活躍してない？俺もSTGの奴らビビらせなかったあ」と陸。

「どうせ、また追ってきますよ。STGは国の機関で超能力者を管理するという名誉があるからね。それに超能力者を逃がしたということが公になれば国民から圧力がかかる」と壱。

「俺らに賞金賭けているんだぜ？もう、公にしているじゃん」と嵐士。

「…たぶん種族不明として賞金賭けているんじゃないかな？いちおうキーブリティの身分は一番守られているから、私がキーブリティだと確認出来れば、賞金は一度消えると思うよ？でも、また復活するだろうね。ちなみにSTG以外は逃げたことをそこまで重要視はしてないと思うよ？私達の賞金は全てSTGが隠しカメラの映像を写真にして国政に送りつけ賞金を懸けるように依頼したんだろうね？」と壱。

「じゃあ、にいはんは逃げる必要くない？」と陸。

「陸…私が前にいった話聞いていた？」と壱。

「えっ？…なんだっけ？」と陸。

「まあ、いいや、どうせ雰風と燦と鏡平にまた話さなきゃと思って

いたし…」と唄。

「ああ！パドリックの話？」と嵐士。

「そう！…」と唄。

「パドリック？」と不思議そうに聞き返す霧風に鏡平がパソコンを見ながら言う。

「パドリック共和公王国。人口5000万人。首都パドリク、世界大戦の時に伝説となった無敵のパドリック兵の出身国。六人の王様がおり、六種族が平等に暮らす国。」

「そう。パドリックはこの世界で唯一、種族による身分制度がない国なんだ。だからこの国に上手く亡命出来れば、私達は身分の心配をすることなく一緒にいれるんだ。」と唄。

「でも、パドリックはこの国から遙か西にあるのですよ？今、僕らがいるユースタリア国がパーラーリア地区でパドリック共和公国はウェーストラーリア地区その間にはセントラーリア地区、イーストラーリア地区、カンターラーリア地区、砂漠地区、高地地区、オアスラーリア地区、の少なくとも6つの地区を超えていけないとなりますよ？それに1つの地区に少なくとも4つの国が入りますよ？」と鏡平。

「そんなことは承知の上だよ？私はもう十年前のようなことを繰り返したくないんだ」と唄。

「…」

鏡平はなにも言えず下を向いた。

沈黙が続いた…。鏡平も陸も嵐士も燦も霧風も10年前の唄の姿が10年間脳裏に焼き付いて離れなかった。

「私はこの10年、ただ兄弟を国から取り戻すことしか考えていなかった。覚えている？私が10年前君たちに言った言葉…」と唄。

霧風は10年前の光景を思い浮かべる。

あれは大雨の日、5才の唄が国政の役人に押さえつけられながら叫んでいた。

「陸！！嵐士！鏡平！！燦！！霧風！」と役人に無理やり連れてい

かれる5人に向かって手を伸ばす。

「兄貴！兄貴！」と必死に手を伸ばす陸。

「イヤだ！放せ」と暴れる嵐土。

震え涙を流しながら壱に向かって必死に手を伸ばす鏡平。

「壱兄さん！」と必死に叫ぶ燦。

殴られ蹴られ血を流し、ぐったりしながら役人の腕の中で壱に血だらけの手で手を伸ばす自分の姿。

それぞれの車に乗せられ去って行く兄弟に必死に叫んでいる兄の姿を霧風は朦朧とする意識の中で見ていた。

車が発車する時、壱兄さんは役人の腕をすり抜け何かを叫びながら5台の車を追っていた。

あの時壱兄さんは何を叫んだのか？霧風の耳にはその言葉は届いていなかった。

「…絶対、迎えに行くから！…だろ？」と陸が静かに言う。

「さすが！陸だねえ？」と壱は笑って言う。

「10年間、その言葉が俺の中には響いていた」と陸は恥ずかしそうに言う。

「だから、迎えに来たのか！！」と嵐土。

「そういうこと！！」と壱は笑う。

「確かに兄貴は昔から絶対、約束破らなかったな？」と陸。

「そうそう、陸と嵐土には何度約束をやぶられたか」と壱。

「うっせ」と嵐土。

「アハハ…まあ、いいじゃん」と陸は笑った。

「そういえば、パドリックに亡命するのは分かったけど…その国ってそう簡単に亡命できるの？」と霧風。

「おお！！よくそこに気づいたな？霧風」と嵐土が褒める。

「私達、6人が一斉に亡命すれば大丈夫。」と壱。

「どういうことですか？」と鏡平。

「アレだろ？…6種族が集まった状態で亡命すればいいんだろ？」と陸。

「おい！！なんでそういう微妙なところだけ覚えてるんだ？陸兄貴！！」と嵐士

「アハハ…」と陸は笑った。

「まあ、陸の言う通りんだけど…細かく言うと6種族が一人ずつ入った6人を1つのグループとして亡命する必要があるんだ。だから、たとえば6人の中にマンカイドがいなくロギアが2人いた場合、亡命は認められない。この場合はロギアを2つのグループに分けて1つのグループにはロギアの変わりにマンカイドを入れて、もう一つのグループにはロギア以外の5種族を入れなければならないんだ」と崙。

「1つの種族から1人ずつでこの世界には6種族あるから6人ってこと？」と霧風。

「そう、さっきも言ったけど…パドリツクは6種族が皆、平等に暮らす国だからそれになじめない人は国を荒らすだけだろ？亡命者はどこの国から来たかパドリツク側には分らないから亡命者を国に入れるのには慎重なんだろうね？」と崙。

「亡命者を篩いにかけているってことですね？」と鏡平。

「まあ、そういうこと！だから私達は誰一人いなくなるワケにはいかないんだ！」と崙。

「なんで？」と陸。

「だから！！陸兄貴！ちゃんと話聞いていたか？」と嵐士。

「うーん…半分くらい？」と言いながら陸は無邪気な笑顔を嵐士にかえす。

「だから！！俺ら6人は皆、種族が違っただろ？」

「うん…」

「パドリツクに亡命するには6人全員で亡命しなきゃならないって言うルールがあるワケ！！！！」

「へーえ」と陸は感心したように頷く。

「分かった？」と嵐士。

「うんうん、分かった、分かった」と陸は楽しそう笑って頷いた。

「ってか、壱兄貴これからどうするんだ？」

「うゝん…」と壱は少し悩んで言った。

「今日はもう宿へ行こうか？この道路の先にマルシャという港町があるはずだから…すぐくのどかな町だから私達が追われ者でも気づかないとおもっよ…」

「それはマルシャの民の町か？」と陸が壱に聞く。

「その通り！！さすが陸だね」と壱。

(3) (後書き)

ある理由でしばらくこの作品を休載させていただきます。

解決し次第、連載を開始いたします。ご迷惑をおかけしてすみませ

ん m (| |) m

今後ともよろしく願います。

b y ・天海 聖哉 & 成田 慎也

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5732f/>

6つ子のパドリック

2010年10月10日05時37分発行